

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

# 「場の創出」としての文法化：不定冠詞は何故定冠詞より遅く出現したのか

著者	大澤 ふよう
ページ	1-6
発行年	2018-06-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00022279">http://hdl.handle.net/10114/00022279</a>

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02614

研究課題名（和文）「場の創出」としての文法化：不定冠詞は何故定冠詞より遅く出現したのか

研究課題名（英文）Grammaticalization as space creation: why did an indefinite article emerge later than a definite article?

研究代表者

大澤 ふよう（OSAWA, Fuyo）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：10194127

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000 円

研究成果の概要（和文）：日本人にとって習得が難しい冠詞は、英語において遅く14世紀に出現したが、これは、「文法化」と言われる大きな言語変化の1つである。本研究はある語彙が意味を漂白化させ、文法機能中心の語に変化するという従来の文法化以外の文法化、すなわち構造変化としての文法化という視点を明確化することができた。そして、不定冠詞がなぜ遅く出現したのかは、二次的文法化という視点から分析できることを提案した。一般的に「文法化」は二段階で進行するという仮説である。一次文法化は定冠詞を生み出し、その結果出現した「場」が不定冠詞を生み出すことになった。また、出現した冠詞は古英語においては存在しない二重目的語構文を可能にした。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to examine why an indefinite article "a/an" appeared later than a definite article "the" in English. I have shown that the emergence of articles has been the result of grammaticalization. Traditionally, grammaticalization is defined as the process whereby lexical items come to serve grammatical functions. I have proved that grammaticalization involves the structural change in a given structure. Furthermore, I have proposed that grammaticalization progresses in two stages: primary grammaticalization and secondary one.

The primary grammaticalization creates a new functional space in a structure. Old English demonstratives "se/seo" contributed to creating a new functional space, i.e., DP. The definite article emerged like this.

The ancestor of an indefinite article numeral an="one" was grammaticalized due to this functional space DP, which is an instance of secondary grammaticalization. This is the reason of the later emergence of an indefinite article.

研究分野：人文科学

キーワード：定冠詞 不定冠詞 古英語 中英語 文法化 属格 言語習得

### 1. 研究開始当初の背景

冠詞は日本人英語学習者にとって習得が難しいものの1つとしてよく話題になる。多くの研究書もあいついで出版され意味論的観点からの議論は深まっている。本研究は、こうした研究で得られた知見を踏まえながら、冠詞の問題は日本人が、母語である日本語には存在しない冠詞の習得が苦手なのは当然であるといった認識に留まる問題ではなく、英語の通時的変化の中心に据えられるべきトピックであり、通言語的な分析の切り口の1つとして重要なトピックであるとの認識に基づいている。

実際、冠詞の存在は、言語の差異を明らかにする切り口となる問題である。日本人は英語の冠詞は名詞につくアクセサリーのように考える、つまり名詞が名詞句の中で主要な部分であり、名詞が冠詞を取ると考えているが、英語の母語話者は全く逆に冠詞がまず意味のカテゴリーを決め、その後にくる名詞を決定する、つまり名詞句の主要な部分は冠詞であり、冠詞が名詞を取ると考えていると指摘される。

この問題は、実は句構造の主要部(head)は何かという重要な理論的な問題に関わってくる。生成文法では、名詞句の主要部分は、従来のように語彙的名詞ではなく、冠詞あるいは決定詞(determiner) であるとする、Abney (1987) が提唱したDP仮説(DP Hypothesis) が広く受け入れられている。これは先の英語の母語話者の直感と一致する。DP仮説では、名詞句は determiner の投射である DP であり、名詞(noun)が主要部ではなく、冠詞を含む決定詞 D が主要部であり、語彙的名詞の名詞句(NP)はその補部に過ぎないとされる。つまり英語の母語話者が持っている言語直感に、理論的な根拠があることが証明された画期的なものである。

このDP仮説が提唱されたことで、従来説明が難しかった John's book の -'s のような属格の分析がうまく説明されるようになった(cf. Chomsky 1986)。現代英語では、-'s や his, my などが D とされる。つまり、名詞句の主要部である。

さらに古英語においては現代英語のような義務的冠詞は存在していなかったという事実がある。存在していたのは、義務的ではない、指示詞であり、現代英語であれば、冠詞が必要とされる文脈でも、無冠詞で使用される名詞の例は、古英語の文献においては珍しくない。つまり古英語の名詞句は DP ではなく、名詞 noun が主要部である NP だったという主張が出てくる(cf. Gelderen 1993, 2000, 2004; Osawa 2000, 2003, 2007, 2009)。現代英語の名詞句は DP であることは、明らかであり、すると、英語において名詞句は語彙的名詞が主要部である NP から機能範疇が主要部である DP へと構造変化したということが明らかになる。

### 2. 研究の目的

次のような点を明らかにする。

(1) 義務的な冠詞類を含む機能範疇としての決定詞 determiner (D)は古英語の時代には存在せず、中英語期に現れた。D が存在しない証拠として意味的な証拠ではなく統語的証拠を援用する。すなわち再帰代名詞現象は D があることで生じる束縛現象であるが古英語にはこの現象は存在しなかった。him は himself の意味でも、現代と同じ him としても用いられた。また、the king of England's hat や the man I saw's coat のようないわゆる群属格 group genitive が存在していなかったことが証拠となる。実際、D が出現した中英語期にこれらの構造が出現したという事実がある。

(2) (1)で述べた D の出現は、「文法化(grammaticalization)」の1つであるが、このような新しい機能範疇の出現という文法化は、語彙的要素が文法的要素になるということが文法化であるという、従来型の文法化理論ではあまり指摘されてこなかった側面を捉えている。つまり「文法化」とは統語構造内に義務的な機能範疇が登場したことによる「場の創出」の結果であると捉える見方である。特に古英語の名詞の属格語尾の-es が-'s という主要部 D になったことがその証拠である。機能範疇による「場の創出」という新しい文法化の概念を提案する。

(3) (2)で提案した新しい文法化の概念により、英語において不定冠詞が定冠詞より遅く出現したことが説明される。不定冠詞(の先行形)は名詞句内に定冠詞の先行形によって創出された「場」に入り込みその「場」で自身が文法化されて主要部 D になることができた。不定冠詞の先行形は文法化にあまり貢献はしなかったといえる。

(4) また現代の世界の言語を通観した場合、定冠詞と不定冠詞の間にはその分布において「格差」が見られる。マックスプランク研究所の The World Atlas of Language Structures Online (WALS)など参照。

上の(2) (3)に基づいてこの「格差」を切り口として、冠詞というものの本質に迫る。冠詞が全ての時代の全ての言語に存在するという、言語普遍的な存在であるかどうかの検証を行う。

### 3. 研究の方法

本研究は、理論的研究の部分と、コーパスを活用する実証的方法を併用する。NP, DP、主要部、語彙範疇、機能範疇といった概念に関しては生成文法の理論的成果を活用する。

そうして練られた仮説を検証するには、古英語のテキストを精査することで数量的にも証明が可能であることを古英語の散文を集めたコーパス The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English (YCOE) を使

用して明らかにする。また、通言語的視点からの研究のためには、The World Atlas of Language Structures Online (WALS) など参照して、様々な言語からのデータを活用する。

言語変化の理論的な枠組みとして、創発という概念を用いる。すでに、創発理論(emergence theory)という名称で、過去においても時制の投射であるところの TP の出現や、埋め込み構造が出現してきたことを論じている。(課題番号 18520392, 24520556)

創発理論とは、言語変化の方向性を、語彙的要素である名詞や動詞などからのみ構成される段階から、機能範疇(いわゆる機能語、さらに上で述べた D, また時制要素である T など)を含む段階へと徐々に変化していくものであると捉える理論である。これは、歴史言語学で議論される「文法化 grammaticalization」とも重なるところがある。しかし、従来型の文法化理論も当然取り入れることになるが、さらに文法化の新しい側面も、この創発理論により、浮かび上がってくる。

#### 4. 研究成果

2015年度は、「文法化」現象を扱うにあたって、文法化に関する先行研究をまとめ、それらの評価に重点を置いた。文法化に関しては古くは Meillet (1912), そして Givón (1979), Janda (1980), Lehmann (1982), Traugott and Heine (1991), Allen (1997), Hopper and Traugott (2003) など様々なアプローチから多くの先行研究が存在する。特に本研究に関わってくると思われるのは、属格語尾の -es が -'s という主要部 D になった事実で、これは多くの歴史言語学者を悩ませる問題となっている。Janda (1980) は、この変化は文法化の通常の流れ、すなわち統語的要素が形態的要素に変化するのと真逆の流れ、つまり形態的要素が統語的要素に変化していると指摘した。Givón (1971) も文法化の流れは「統語から形態へ」であるはずだと主張している。したがって、上のような属格にまつわる事実、説明がつかない事象としてしばしば話題になってきた。

しかし、この属格語尾 -es の変化も機能範疇による「場の創出」という新しい文法化の概念を導入すると一見「脱文法化 degrammaticalization」(cf. Ramat 1992, Norde 2009) と見える流れが実はそうではなくて、これも文法化の1つであるということが理解できることを発見した。

本研究は生成文法の枠組みで統語論を中心に行われるので、生成文法の立場から文法化を捉えている先行研究もまとめてみた。Roberts and Roussou (2003), Gelderen (2004) などがあるが、数は多くはない。

また、名詞句構造に関しても多くの先行研究が存在するのでそれらのまとめと評価を

行った。Abney (1987) の DP 仮説 (DP Hypothesis) が提唱されて以来、それを支持する研究もまた、批判的な研究も多く発表されてきた。名詞句の内部構造についても、Cinque (1999) のようにいくつもの複雑な階層を設定する分析も登場している。中でも重要な先行研究である Longobardi (1994, 2001), Bernstein (2001), 天野 (2005) などの、まとめと総括を行った。

これらの先行研究の総括と批判から生まれた名詞句の英語における NP から DP への変化という点を中心に、立正大学で開催された日本英文学会第 87 回全国大会でのシンポジウム (オーガナイザーも務めた) 「名詞句の分析」で「歴史から英語の冠詞の何故に迫る」という発表を行った。カナダの British Columbia 大学で開催された第 9 回 Studies in the History of the English Language (SHEL9) で定冠詞と不定冠詞の出現について「The Emergence of the Indefinite Article: Grammar Change in English」という発表を行った。

また、文法化現象には従来とは違う、統語的な構造変化としての文法化という側面があることを盛り込んだ、発表「Transitivity and Passivity: A Diachronic Study of Passives」をオランダの Leiden 大学で開催された第 48 回 Societas Linguistica Europea で行った。また、文法化理論を構造変化の観点から構成するための一貫として、英語の史的变化において、機能範疇の発達とともに、他動詞構文にも変化が生じたことを、関西外国語大学で開催された日本英語学会第 33 回大会のシンポジウム「構文変化と談話・情報構造 データと理論の融合をめざして」において「構文変化と意味情報」というタイトルの研究発表を行った。

また、上記の英文学会での発表をまとめた論文「歴史から英語の冠詞の何故に迫る」を The Proceedings of the 87<sup>th</sup> General Meeting of the English Literary Society of Japan に掲載した。

英語の冠詞システムが英語の歴史において新しく登場したものであることから、日本人の英語学習者にとって、習得が困難であることを単なる、日本人の英語力不足の問題とするのではなく、冠詞システム自体のあり方から論じた「The Diachronic Development of English Nominals」という論文を法政大学文学部紀要第 72 号に掲載した。

2016年度は、さらに一歩進んで、言語変化の大きな設計図を提示し、その中で文法化であることを示そうとした。すなわち、「文法化」とは構造的な変化であって、確かに形態的なステータスの変化や、意味的变化、すなわち意味の漂白化により、具体的な意味が薄れていくといったことは重要な文法化の性質ではあるが、もっと重要な本質は統語構造上の変化であるという仮説をある程度まとめた形にして提示することができた。

具体的には、古英語の属格語尾-es が -'s という定冠詞と同じステータスを持つ存在に変化していった過程を、古英語には存在していなかった群属格 group genitive という新しい構造が中英語に現れたという事実に基づいて明らかにし、ある程度証明することができた。また、統語的冠詞の出現がもたらした新しい構文として、群属格だけでなく2重目的語構文にも注目した。まだ萌芽的ではあるが、その点をまとめて「The Double Object Construction: Its Absence and Emergence in the History of English」として、ポーランドのポズナニ大学で開催された第46回 Poznan Linguistic Meeting (PLM 2016)で発表した。また、DP,TP といった機能範疇の創発に関わる構造的な文法化現象の1つとして主語の義務化の問題も機能範疇の創発で説明がつくのではないかという観点からの研究を「EPP 再考 主語は普遍か」というタイトルで、金沢大学で開催された第34回日本英語学会大会で発表を行った。

さらに上で述べた群属格の登場について「The emergence of Group Genitives: the Emergence of a D system」という論文にまとめて法政大学文学部紀要第74号に掲載した。また、機能範疇の発達と文法化が深く関わっていることから、機能範疇の未発達言語段階における主語の義務性の問題について再考が必要であるという、上で述べた内容をさらに進展させた論文を「EPP 再考 主語は普遍か」という論文にまとめてJELS 34（日本英語学会第34回大会研究発表論文集）に掲載した。

2015年、2016年までの研究により、2017年度は、冠詞の英語における出現は、「文法化」と言われる大きな言語変化の中においてこそ、正しくその全貌が解明できることを証明できたと思う。ある語彙が意味を漂白化させ、文法機能中心の語に変化するという従来の文法化以外の視点からの文法化、すなわち構造変化としての文法化という視点を明確化することができた。すなわちDPの出現は、名詞句内に常にDという「場・空間」が義務的に存在することを意味する。そしてこの「場」が名詞句内に確立することで、意味に制約されることなくその「場」に入る要素が「場」の力により「文法化」されることを意味する。これらの要素の代表が現代英語の不定冠詞 a/an の先行形である古英語の数詞 an=one である。the の先行形である指示詞 se, seo や、-'s の先行形である属格語尾-es が、このDという場を創出することに牽引力として貢献したが、これを第一次文法化と呼ぶ。

これに比べると、この数詞 an は貢献度は低くむしろ新しくできたDの場所に移動してそこで、自身が文法化の恩恵を受けた。従って出現時期が定冠詞より遅れたことが説明できる。このように、他の要素が作った「場」を利用して自身が文法化することを第二次

文法化と定義した。すなわち、この研究では文法化現象には、文法化そのものを起こす力を持つ要素と、自身の貢献度は低い結果的には同じ統語的場所に関することで文法化の恩恵を受ける要素があることを指摘する。そして、不定冠詞がなぜ遅く出現したのかに関して、二次的文法化という視点から分析できることを提案した。2017年度アメリカ合衆国カンザス州立大学を会場として開催された第10回 The Studies in the History of the English Language (SHEL10)では、この問題を正面から論じた研究発表「The Later Emergence of an Indefinite Article」を行った。このことがきっかけになり、次の研究課題へと発展させることができた。すなわち単に、冠詞だけではなく、一般的に「文法化」は2段階で進行するという仮説である。また、この課題に関連して7月にフランスのフランソワ・ラブレール大学で開催された第5回 CBDA という学会で、現代英語で広く使われる2重目的語構文も実は古英語においては存在せず、中英語以降に表れた構文であるが、この構文を可能にしたものは、実は冠詞システム DPであることを論じた。2重目的語構文のような幅広く使われる構文がそもそも、それほど古くから存在する構文でないことや、冠詞システム、すなわち冠詞を主要部とする DP という機能範疇の出現に依拠しているという主張はおそらく、世界で初めてのものであったと思う。それぞれ、各国の学者からも高い評価を得て、次のより大きく重要な研究への道筋が見えてきた。

この構造変化としての文法化という視点から、DPの出現は、名詞句内に常にDという「場・空間」が義務的に存在することを意味する。そしてこの「場」が名詞句内に確立することで、意味に制約されることなくその「場」に入る要素が「場」の力により「文法化」されることを意味する。これらの要素の代表が現代の不定冠詞 a/an の先行形である古英語の数詞 an であるということを論じた論文「Grammaticalization as Space Creation」を法政大学文学部紀要第75号に掲載した。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

### 大澤ふよう

論文名 Grammaticalization as Space Creation: A New View of Grammaticalization  
掲載誌名 No. 75 Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University

査読有り

2017年

73-85.

大澤ふよう

論文名 「EPP 再考 主語は普遍か」  
掲載誌名: JELS, 日本英語学会第34回大会  
研究発表論文集  
査読有り  
2017年  
137-143.

大澤ふよう

論文名: The Emergence of Group Genitives:  
the Emergence of a D system  
掲載誌名: No. 74 Bulletin of the Faculty  
of Letters, Hosei University  
査読有り  
2017年  
47-58.

大澤ふよう

論文名: The Diachronic Development of  
English Nominals: Why is the Article  
System so Difficult?  
掲載誌名: No. 72 Bulletin of the Faculty  
of Letters, Hosei University  
査読有り  
2016年  
115-130.

大澤ふよう

論文名: 歴史から英語の冠詞の「何故」に迫  
る  
掲載誌名: The Proceedings of the 87th  
General Meeting of the English Literary  
Society of Japan  
査読有り  
2015年  
82-83.

〔学会発表〕(計8件)

大澤ふよう

発表題名: What the Emergent DP Brought  
about: the Emergence of the Double Object  
Construction in English  
学会名: 5th International Biennial  
Conference on the Diachrony of English  
発表年月日: 2017年7月4日  
発表場所: トゥール(フランス)フランソワ・  
ラブレール大学

大澤ふよう

発表題名: The Later Emergence of an  
Indefinite Article: Grammaticalization, a  
New Definition of Two Grammaticalization  
Components  
学会名: 10th Studies in the History of the  
English Language  
発表年月日: 2017年6月3日  
発表場所: カンザス (アメリカ合衆国)  
カンザス州立大学

大澤ふよう

発表題名: EPP 再考 主語は普遍か  
学会名: 日本英語学会第34回全国大会(招  
待講演)  
発表年月日: 2016年11月12日  
発表場所: 金沢市(石川県)金沢大学

大澤ふよう

発表題名: The Double Object Construction:  
Its Absence and Emergence in the History  
of English  
学会名: 46th Poznan Linguistic Meeting  
(PLM 2016)  
発表年月日: 2016年9月16日  
発表場所: ポズナニ (ポーランド) アダム・  
ミックビッチ大学

大澤ふよう

発表題名: 構文変化と意味情報  
学会名: 日本英語学会第33回全国大会シン  
ポジウム「構文変化と談話・情報構造 デー  
タと理論の融合をめざして」  
発表年月日: 2015年11月22日  
発表場所: 枚方 (大阪府) 関西外国語大学

大澤ふよう

発表題名: Transitivity and Passivity: A  
Diachronic Study of Passives  
学会名: 48th Annual Meeting of Societas  
Linguistica Europea  
発表年月日: 2015年9月2日  
発表場所: ライデン (オランダ) ライデ  
ン大学

大澤ふよう

発表題名: The Emergence of the Indefinite  
Article: Grammar Change in English  
学会名: 9th Studies in the History of the  
English Language  
発表年月日: 2015年6月6日  
発表場所: バンクーバー (カナダ) ブリ  
ティッシュ・コロンビア大学

大澤ふよう

発表題名: 歴史から英語の冠詞の「何故」に  
迫る  
学会名: 日本英文学会第87回全国大会シン  
ポジウム「名詞句の分析」  
発表年月日: 2015年5月24日  
発表場所: 品川(東京都)立正大学

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0件)

6. 研究組織  
(1) 研究代表者  
大澤 ふよう (OSAWA, Fuyo)  
法政大学・文学部・教授

研究者番号：10194127